

第3章 熟議が高校生・大学生に与える影響

～事前・事後アンケートと自己認識シートに見る高校生・大学生の変容～

昨今、高等学校、大学の中であらたな教育・学習、そしてその評価方法が議論され、実践されはじめている。平成 26 年、中央教育審議会答申「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について」が提出された。本学における熟議も、「アクティブラーニング」の一環として毎年学生たちとともに作り上げてきたプログラムである。高大接続を視野に入れた大学教育の質的な転換を目指す改革が企図されている現代において本学の中でその一翼を担うプログラムであることは言うまでもない。重ねて高校、大学を含む教育改革は「受動的」から「能動的」へ、知識の蓄積ばかりでなく、その応用へとといったように「課題の発見と解決に向けた主体的・協働的に学ぶ」ことが重要であることが強調されている。その点で言えば、熟議は高校生の学びの場でもある。とりわけ今年度の「熟議 2016 in 兵庫大学」は、主として高校生・大学生を中心に据えたプログラムとして企画された。

さて、本章の主題となるここでいうところの「影響」ということには多義的な意味を含んでいると考えられる。出会い、知識の獲得、たわいもない話、話し合いをする空間、さまざまなことやもの、そして「人」といったように参加者はいうまでもなく、このプログラムの準備段階から当日にかけて多くの影響を受けることとなった。

学校現場においても教師が「何を教えるか」から児童・生徒が様々な「もの」や「こと」から影響を受けつつ「何ができるようになるか」にポイントがうつりつつあり、「何をどのように学ぶのか」ということが関心ごととして見逃せないポイントになってきている。そうした情勢の中で、「具体的に何をするのか」はそれぞれの教育現場において最も重要であるが、それほど多くの事例が報告され、その実践が分析され共有されているわけでは必ずしもない。そのなかで、2012 年にはじめて本学で実施された熟議から 4 年をかけて継続的に、常に批判的検討を行いつつ行われている本学における「熟議」は、高大接続のあり方、アクティブラーニングの方法などを検討するうえで、そしてなにより、高校生や大学生をはじめとした学習者にとってゆたかな学びの場として貴重なプログラムである。

本章では、この影響を「学び」ととらえ、高校生・大学生が熟議という機会を経て、何についてどのように学んだかということを事前事後アンケートと自己認識シートに基づいて検討していくこととする。

1. 事前・事後アンケートにみる高校生の変容～高校生は何を期待し、何を学んだか～

詳細については、第4章に譲るが、兵庫大学熟議方式では、熟議のプロセス、つまり熟慮の段階の前の、参加者の意識、特に熟議を含む話し合いに対する意識及び、熟議テーマに関わる複数の課題への意向を問うアンケート調査を実施している。これを事前アンケートと呼んでいる。

一方、熟議の中で議論の段階の当日には、議論の後の振り返りの一環として、熟議への評価及び、熟議テーマに関わる複数の課題への意向を、事前アンケートの内容と同じ設問で問うている。これを事後アンケートと呼ぶ。これらは高校生・大学生など若年者が、民主主義の基盤となる話し合いについて、どのような認識を持っていたのか、そしてそれがどう変化をしたのかを把握することができるほか、熟議テーマに係る各種課題への意識の変化を知ることにもなる。

(1) 事前アンケートにみる高校生の特性と熟議のイメージ

今年度の熟議に参加する高校生は、ほぼワークショップの参加経験がない生徒であった。しかしながら、多様な考えを知り、考える機会となることを熟議に期待している様子がデータから窺える【図3-1-1】。また、高校生の多くが他者の意見を聞くこと、多世代に渡る人間関係の構築への期待を寄せていた一方で、意見をまとめて表現すること、年長者の意見に流されてしまうのではないかという不安も同時に持っていたと推測する【図3-1-2】。

3. 「参加者が議論し、対策や方針を作成する」という方法について、ご経験を踏まえ良い点と悪い点を次の一覧より1つずつ選び、それぞれ番号を記入してください。なお、良い点、悪い点がない場合、それぞれの欄は空白のままにしてください。

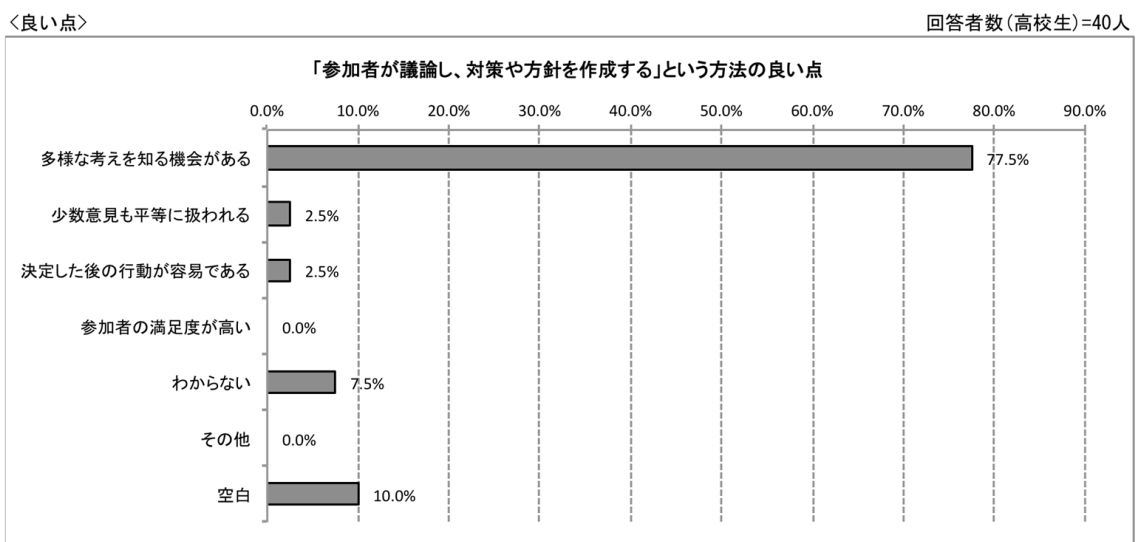


図3-1-1 「参加者が議論し、対策や方針を作成する」という方法の良い点（高校生）

7. 「熟議2016 in 兵庫大学」での「議論の段階」において、あなたはどのことに最も大きな期待を持っておられますか。1つ選び番号を記入してください。

回答者数(高校生)=40人

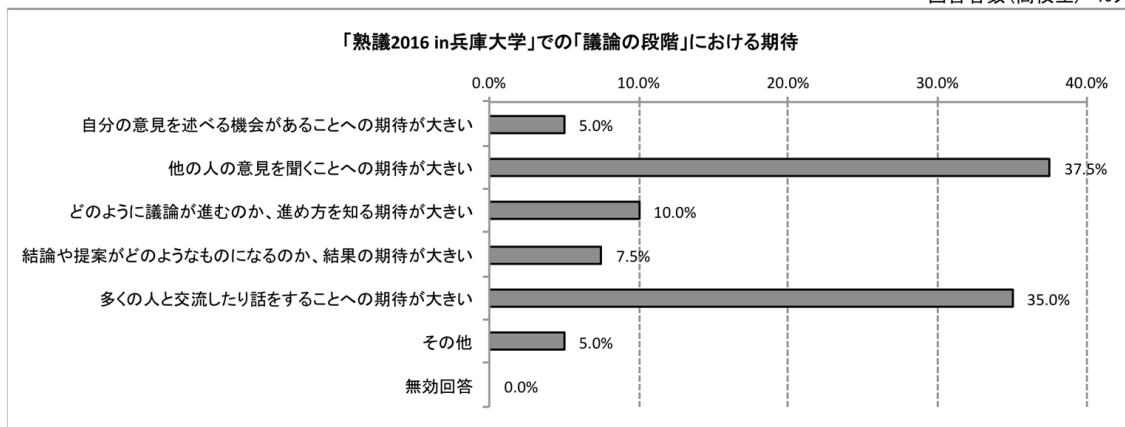


図 3-1-2 「熟議 2016 in 兵庫大学」での「議論の段階」における期待（高校生）

まず、テーマに関するイメージに着目してみる。高校生は、加古川地域の大地震というテーマに関しての関心が非常に高く、今日において重要な課題と認識していた。熟慮の段階が効果的に知識を身につけることに概ね繋がってはいたが、一方で事前の熟慮の段階が、当日の熟議とどのような関係にあるのかが理解しづらかった高校生が 25%いたことも看過できない【図 3-1-3】。

6. 「熟議2016 in 兵庫大学」の資料やホームページをご覧になり、また講座を受け、今回の熟議の進め方についてご理解をいただけたでしょうか。1つ選び番号を記入してください。

回答者数(高校生)=40人

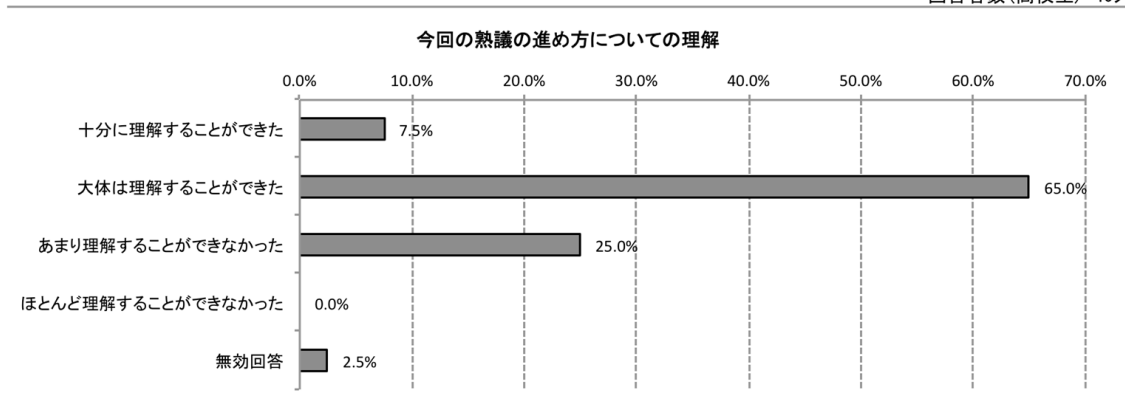


図 3-1-3 今回の熟議の進め方についての理解（高校生）

後に【図 3-1-7】に示すが、高校生は大地震に関わる出来事の中で揺れによる建物の倒壊や、火災や津波に対する関心はもちろん高いが、注目すべきは、情報を得る手段を失うこと、家族との連絡がとれなくなることといった情報をめぐる不安に対する関心が高いことである。情報化のすすむ現代ゆえにその術を失うことの影響が特に高校生にとってはおおきいであろうことが推測される。その他、避難所や救援物資の確保といった生活に密着した事柄も、大きな関心ごとであった。また一方で、学

校・職場の再開は、他の項目と比較してそれほど高い関心は持っていないようであった。続けて災害時の具体的な行動に対する考え方では、行政任せではなく住民主体で、ハード面の整備は重要であるが、ボランティアの受け入れや住民同士の協力といった人間と人間のつながりが生き残ること、生き残った後にも重要であること、そして災害弱者への支援が重要であることなどを認識として強く持っているということがいえる。

以上のことを整理するならば、熟議に参加した高校生の特性、熟議とそのテーマへのイメージは以下の項目に要約することができる。

- A 高校生はワークショップの経験が少ない。しかし、多様な考えを知り、考えることを期待していたが、立場が上の人の意見に影響されずしっかりと自分の意見を言うことには若干の不安を感じている。
- B 高校生は、熟議 2016 のテーマである「今、大地震が加古川地域を襲ったら?」に高い関心を持っており、熟慮の段階の学習で議論の手がかりになる情報を得た。
- C 災害時の関心事として、情報をめぐる不安と、避難所や救援物資の確保といった生活に密着した事柄に対する不安に高い関心を持っている。
- D 災害時の考え方として、住民の力を合わせるということが重要であるという認識を強く持っている。

(2) 事後アンケートから ～何を学んだか～

では、高校生は、熟議を通してどのような影響を受け、認識を再確認し、あるいは変容させていったのであろうか。事後アンケートを手がかりにしながら見ていくこととする。

2. 参加されて満足でしたか。1つ選び、番号を記入してください

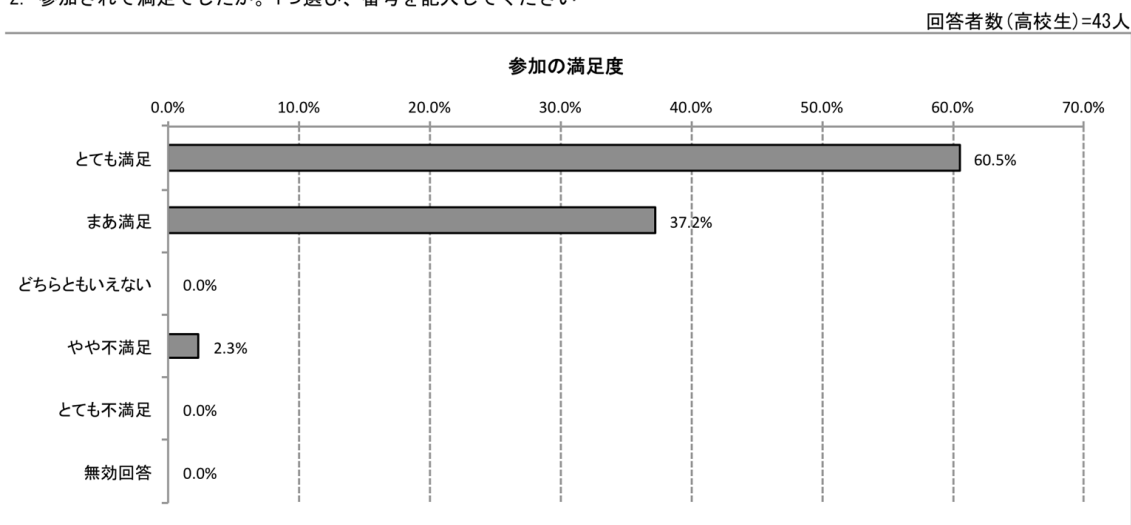


図 3-1-4 参加の満足度（高校生）

熟議 2016 に対する高校生の満足度は高く、「とても満足」と「まあ満足」の項目で 97%を超える【図 3-1-4】。また、7 割を超える高校生は、グループでのワークショップに「意見が出しやすいこれまでとは少し様子の異なる空間」であった印象を持っている。当日のワークショップの場への印象が非常に良かったことが推察される。しかし、熟慮の段階の研修と、熟議当日のテーマとの関係については 23%の高校生が明確な関係を見出しにくかったという印象をもったようであった【図 3-1-5】。今後熟慮の段階に研修形式の学習機会を組み込む場合は、その関係について解題する機会が準備される必要があるのかもしれない。こうした部分は今後の課題である。

[1] 熟慮の段階があるため、自分の意見を整理することができ、発言をし易かった

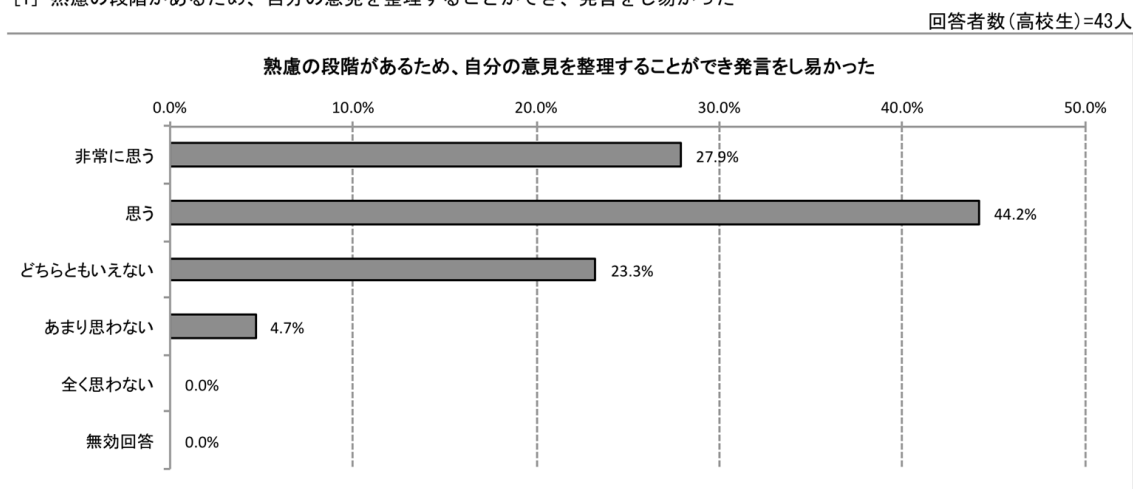


図 3-1-5 熟慮の段階があるため、自分の意見を整理することができ発言をし易かった（高校生）

6. 「熟議2016 in 兵庫大学」の議論の段階で、あなたにとってはどのような成果がありましたか。最も近いものを下記から1つ選び番号を記入してください。

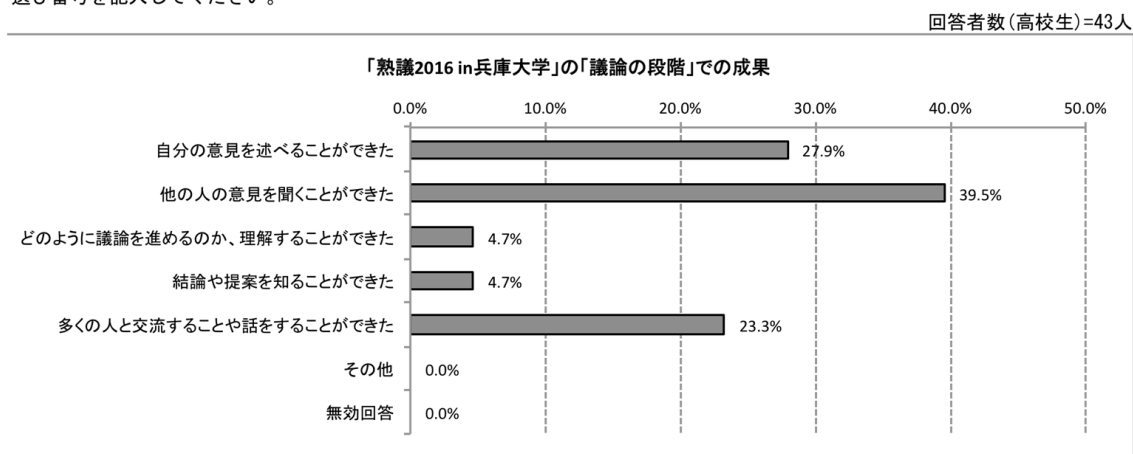


図 3-1-6 「熟議 2016 in 兵庫大学」の「議論の段階」での成果（高校生）

次に、熟議というプログラムの意義と成果について高校生は、地域的な課題が熟議のような手法で課題解決を図っていくうえで最適であり、熟議の技法と成果が行政政策へ反映することを考えている

ようである。しかしながら、関係者の利益が背反する課題についてはなじまないとも考えている。地域課題は、利益が背反する場面が少なくないわけだが、このあたりは大きなジレンマを抱える課題となるであろう。自分の意見を述べること、他人の意見を聞くことは、期待していたことをそのまま「学び」として享受できたという実感を持っている。さらに高校生は、多くの人と交流することそのものについても熟議の大きな成果であると認識しているようである【図 3-1-6】。

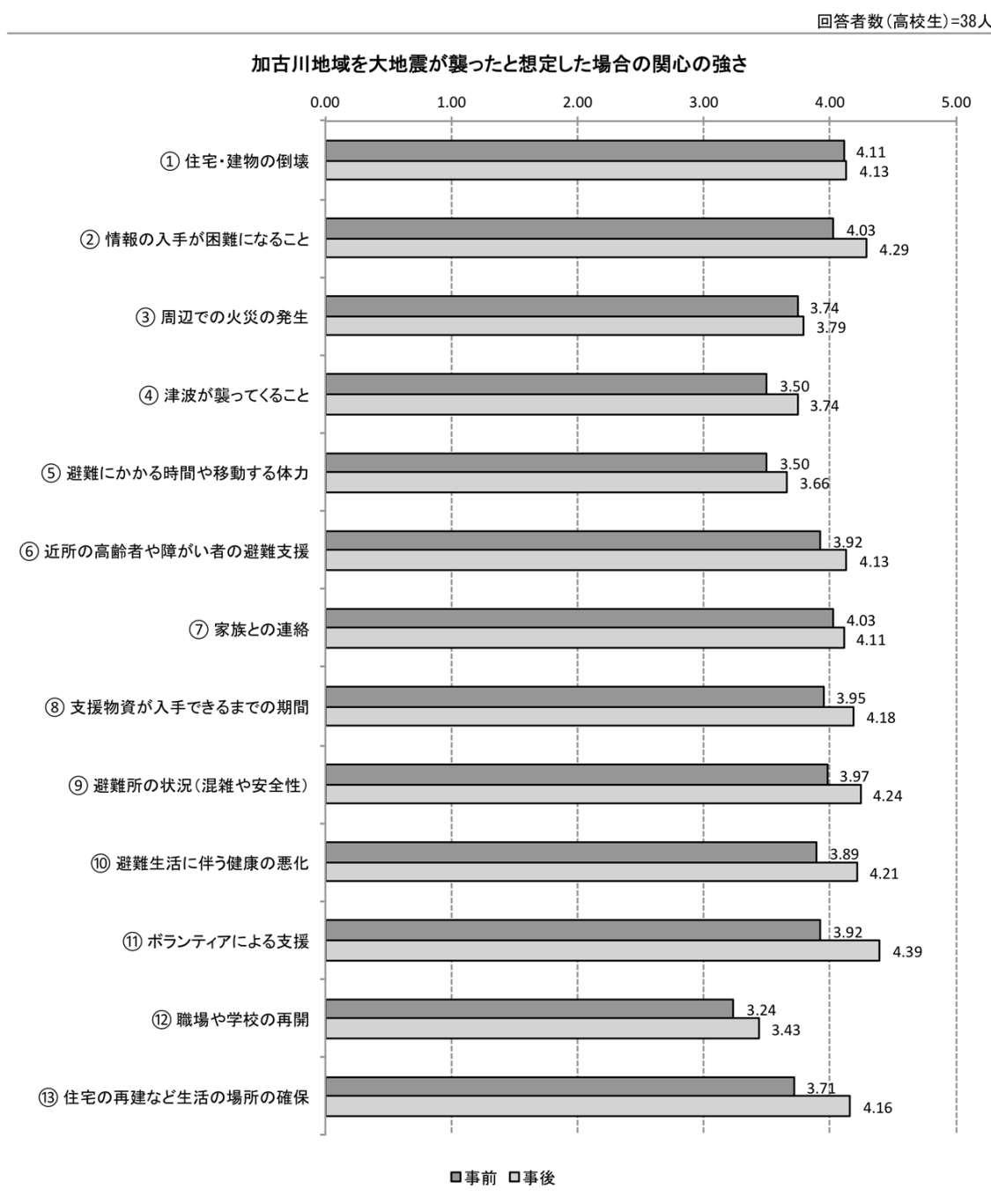


図 3-1-7 加古川地域を大地震が襲ったと想定した場合の関心の強さ（高校生）

災害時の関心をめぐる事柄の変化については、全ての項目について関心の上昇が見られたことそのものが何より重要な意義である。詳細に目をやると「火災の発生」、「津波」、「職場・学校の再開」といった地震の「揺れ」そのものによるダメージとそれへの対応とは距離を置く「二次的な」事柄についての関心は5階評価における「4」を下回っている。

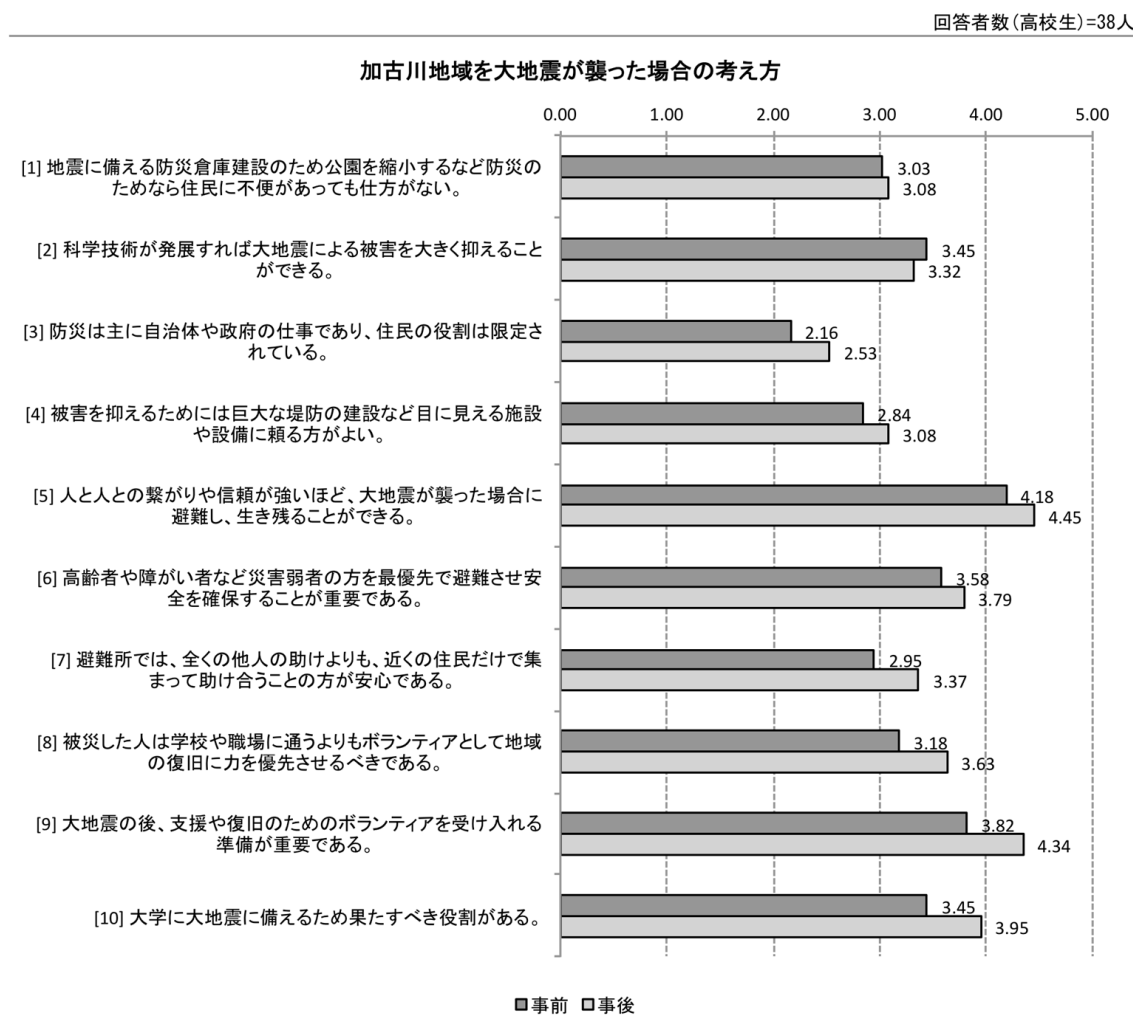


図 3-1-8 加古川地域を大地震が襲った場合の考え方（高校生）

以上のデータに基づいて高校生の特性とイメージの観点を以下のようにまとめることができる【図 3-1-7】【図 3-1-8】。

A 高校生はワークショップの経験が少ない。しかし、多様な考えを知り、考えることを期待していたが、立場が上の人の意見に影響されずしっかりと自分の意見を言うことには若干の不安を感じている。

→高校生の事後アンケートでは、ほぼ全員がワークショップに対して満足しており、多様な考えを知り、考えることだけでなく、人と交流することや話をするそのものが多くの学びにつ

ながるという認識に変容している。

B 高校生は、熟議 2016 のテーマである「今、大地震が加古川地域を襲ったら？」に高い関心を持っており、熟慮の段階の学習が議論の手がかりになる情報となっている。

→熟議を経て多くの学びを得たが、熟慮の段階と熟議の段階には丁寧な関連づけをする必要がある。

C 災害時の関心事として、情報をめぐる不安と、避難所や救援物資の確保といった生活に密着した事柄に対する不安に高い関心を持っている。

→高校生は、大地震が起こる際に起こりうる出来事への関心が全ての項目で高まっている。

D 災害時の考え方として、住民の力を合わせることが重要であるという認識を強く持っている。

→ほぼ全ての項目で事後のアンケートの数値の方が高いが、唯一「科学技術が発展すれば大地震による被害を大きく抑えることができる」についてのみ事後アンケートの数値が減少した。このことは、科学技術が進歩することが災害時の問題を必ずしも解決しないということと同義であろう。

2. 自己認識シートにみる高校生の自己認識の変容

自己認識シートは、自主性、思考力、実行力、対応力、交渉力、会話力、計画力、規律性、運営力、貢献性の 10 項目に関するアンケートであり、事前と事後に参加（予定）学生（大学生も含む）が回答し、その数値の変化を考察することで熟議を通して参加者がどのように変化したかを可視化する調査である。

参加高校生のデータに目をやると、自主性、思考力、実行力、対応力、交渉力、会話力、計画力、規律性、運営力、貢献性の 10 項目のなかで思考力をのぞいた 9 項目が大学生の熟議実施前の数値よりも高い数値を示している。この結果は、日常的に考え、話し、様々な活動に参加している活発で社会問題に関心の高い高校生の姿を想像することができる。活発で、意欲的な高校生は、熟議に参加することで、その数値をさらに高くし、苦手としていた思考力の部分でも非常に大きな数値の向上が見られる傾向にある【図 3-2-1】。しかし、高校生個人のレーダーチャートを見ると、傾向とは異なる状況が見えてくる。それぞれの高校生は 10 項目の調査項目の中で全てが高い数値を示しているわけではなく、個人によって強み弱みがあることがデータからは推察できる。例えば、高校生 A は、参加高校生平均と比して、貢献性と思考力が低かったが、熟議を終え、貢献性はかわらないが、会話力がずば抜けて高まっているという自己認識に及んでいる【図 3-2-2a, 図 3-2-2b, 図 3-2-2c】。高校生 B は、熟議前後で自信を持っていた会話力の数値が下がり、思考力の数値が高くなっている【図 3-2-3a, 3-2-3b, 3-2-3c】。そうした得手と不得手が細かく変化しながら 41 人分統合されることによって全体的にバランスのとれた平均的なチャートになっていることを強調しておく。いずれにしても熟議の中で多くの高校生が多くの学びを得ていることは間違いないわけだが、そうした学びをより丁寧にあと

づけていくような調査を進めていく必要があるのかもしれない。以下に、熟議実施前の高校生の個人データと全体との比較【図 3-2-2a, 図 3-2-3a】、事後の個人データと全体との比較【図 3-2-2b, 図 3-2-3b】、そして熟議実施前後の個人データの変容のグラフを示しておく【図 3-2-2c, 図 3-2-3c】。

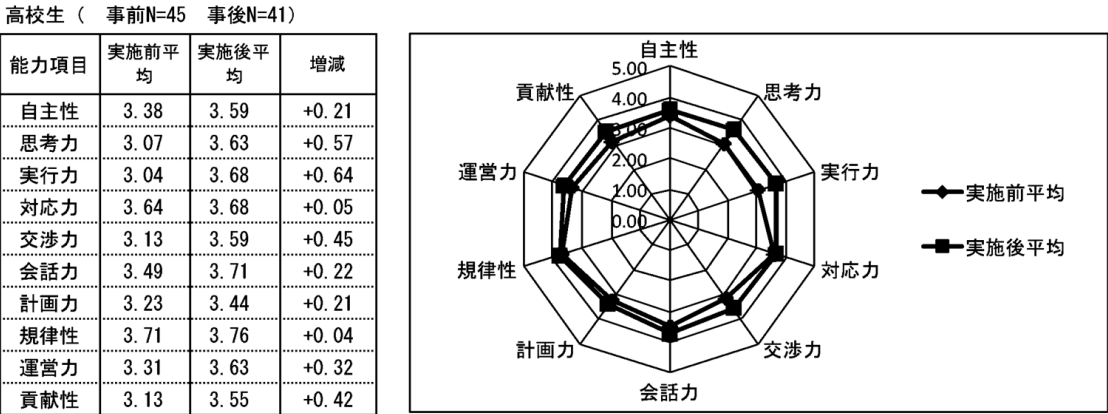


図 3-2-1 高校生（全体）の 10 項目（能力）の熟議実施前後の変化

高校生 A 実施前

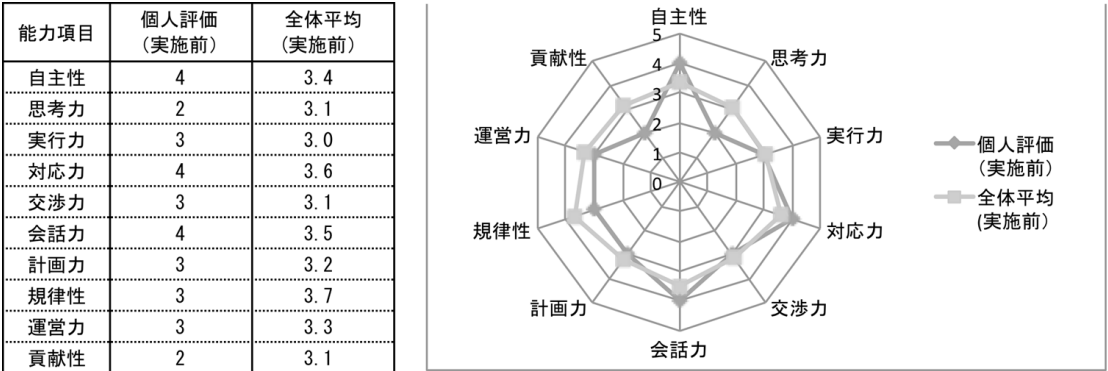


図 3-2-2a 熟議実施前の高校生 A の 10 項目（能力）と全体との比較

高校生 A 実施後

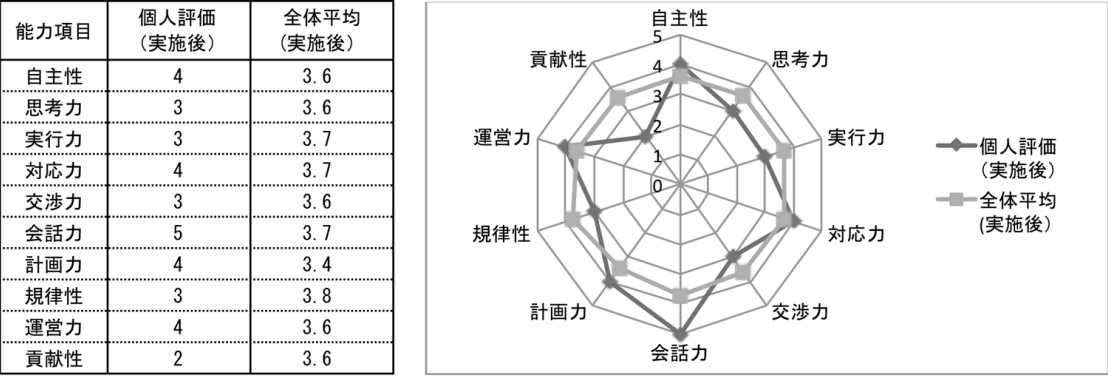


図 3-2-2b 熟議実施後の高校生 A の 10 項目（能力）と全体との比較

高校生 A 個人的変化

能力項目	個人評価 (実施前)	個人評価 (実施後)
自主性	4	4
思考力	2	3
実行力	3	3
対応力	4	4
交渉力	3	3
会話力	4	5
計画力	3	4
規律性	3	3
運営力	3	4
貢献性	2	2

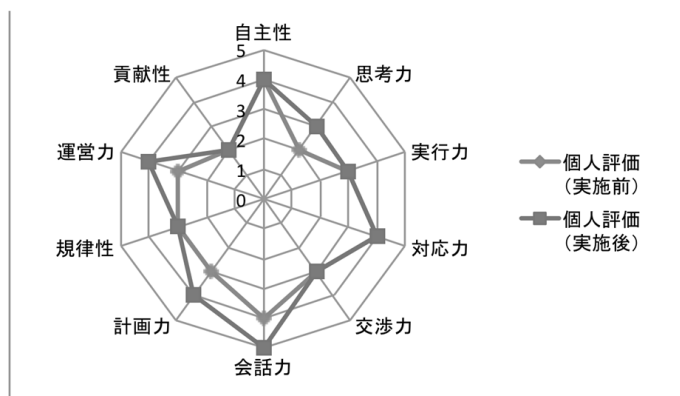


図 3-2-2c 高校生 A の 10 項目（能力）と熟議実施前後の変化

高校生 B 実施前

能力項目	個人評価 (実施前)	全体平均 (実施前)
自主性	4	3.4
思考力	4	3.1
実行力	3	3.0
対応力	4	3.6
交渉力	3	3.1
会話力	5	3.5
計画力	3	3.2
規律性	3	3.7
運営力	3	3.3
貢献性	3	3.1

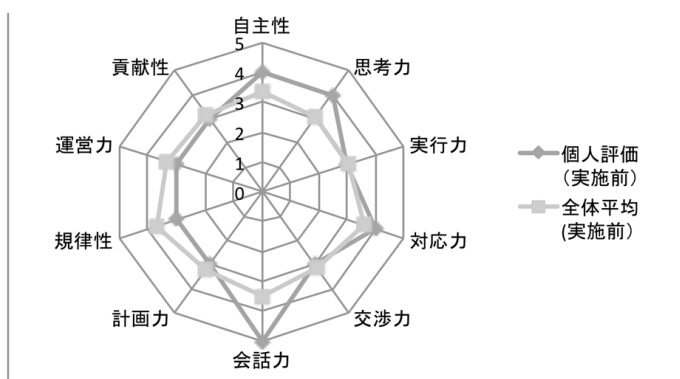


図 3-2-3a 熟議実施前の高校生 B の 10 項目（能力）と全体との比較

高校生 B 実施後

能力項目	個人評価 (実施後)	全体平均 (実施後)
自主性	4	3.6
思考力	5	3.6
実行力	4	3.7
対応力	4	3.7
交渉力	4	3.6
会話力	4	3.7
計画力	4	3.4
規律性	4	3.8
運営力	3	3.6
貢献性	4	3.6

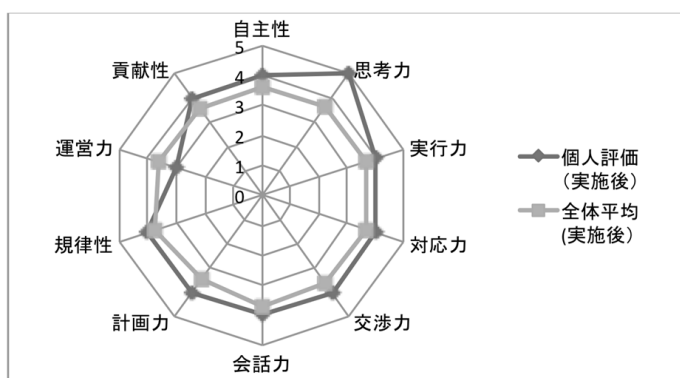


図 3-2-3b 熟議実施後の高校生 B の 10 項目（能力）と全体との比較

高校生 B 個人的変化

能力項目	個人評価 (実施前)	個人評価 (実施後)
自主性	4	4
思考力	4	5
実行力	3	4
対応力	4	4
交渉力	3	4
会話力	5	4
計画力	3	4
規律性	3	4
運営力	3	3
貢献性	3	4

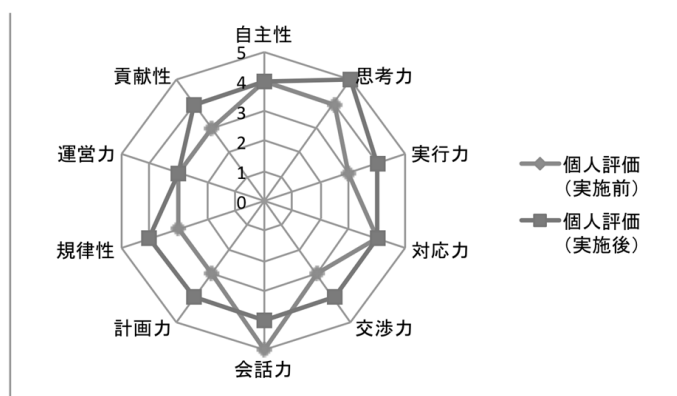


図 3-2-3c 高校生 B の 10 項目（能力）と熟議実施前後の変化

3. 事前・事後アンケートにみる大学生の変容

～大学生参加者の認識変容の傾向と役割による学習成果の違い～

大学生は、高校生とは異なり参加形態が「ファシリテーター」と「ワークショップ参加のみ」の 2 つある。全ての大学生が熟慮の段階の研修会とは異なる形で複数回の研修を受け、ファシリテーションの意味と技法を学んできた。ここでは、高校生同様、事前・事後アンケートを参考にしながら、大学生参加者の傾向と、2 つの役割の間でも学習成果の違いについて検討していきたい。

なお、事前・事後アンケートは、ワークショップ参加者を対象としているため、ファシリテーターには行っていない。大学生での、事前・事後アンケートの対象は、「ワークショップ参加のみ」に限定されるため、その件数は 7 名と少なくなっている。大学生の参加者数は 17 名である。後半示す、自己認識シートは全ての大学生を対象としている関係で回答件数は 17 件となっている。そのため、前述の、2 つの役割の学習成果については、後半で取り上げることとする。

(1) 事前アンケートにみる大学生の特性と関心

熟議への期待についてはアンケートの結果、高校生の傾向として、多様な意見を聞くことができるということが熟議のポイントであると考える参加者が多かったのに対して、大学生は少数意見でも平等に扱われることに意義があると考える傾向にある【図 3-3-1】。また、立場が上の人の意見に流されやすいことに不安を覚えることや、熟議の技法についても非効率的ではないのか、意見がまとまらずに決められないのではないのかという意見が多く若干懐疑的といえる【図 3-3-2】。高校生の傾向との比較で言えば役割を担っていることで、進め方の方法への関心が高い数値を示しているのではないかとと思われる【図 3-3-3】。

また別の回答からは、災害時におこる事柄については、高校生と比較して、情報についての関心は

それほど高くなく、津波への関心もそれほど高くなかった。津波への関心の低さは、瀬戸内海、さらには加古川という土地ゆえの数値と言えるのかもしれない。また、ボランティアの支援、避難所の環境などの生活の場所の確保についての関心が高い。これは参加者に熊本地震の被災地ボランティアに赴いた学生が多かったためと思われる。

3. 「参加者が議論し、対策や方針を作成する」という方法について、ご経験を踏まえ良い点と悪い点を次の一覧より1つずつ選び、それぞれ番号を記入してください。なお、良い点、悪い点がない場合、それぞれの欄は空白のままにしてください。

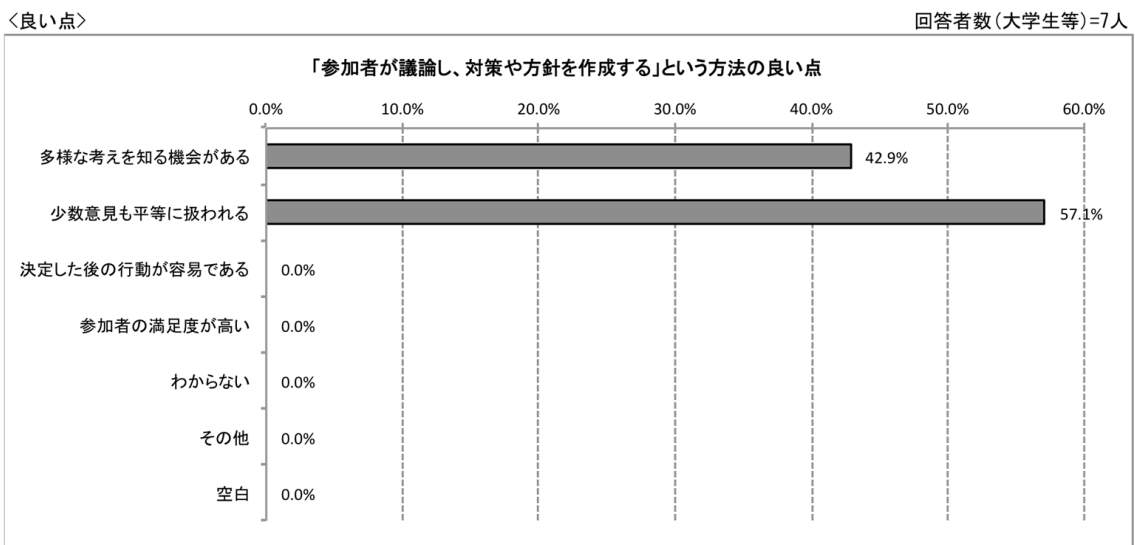


図 3-3-1 「参加者が議論し、対策や方針を作成する」という方法の良い点（大学生等）

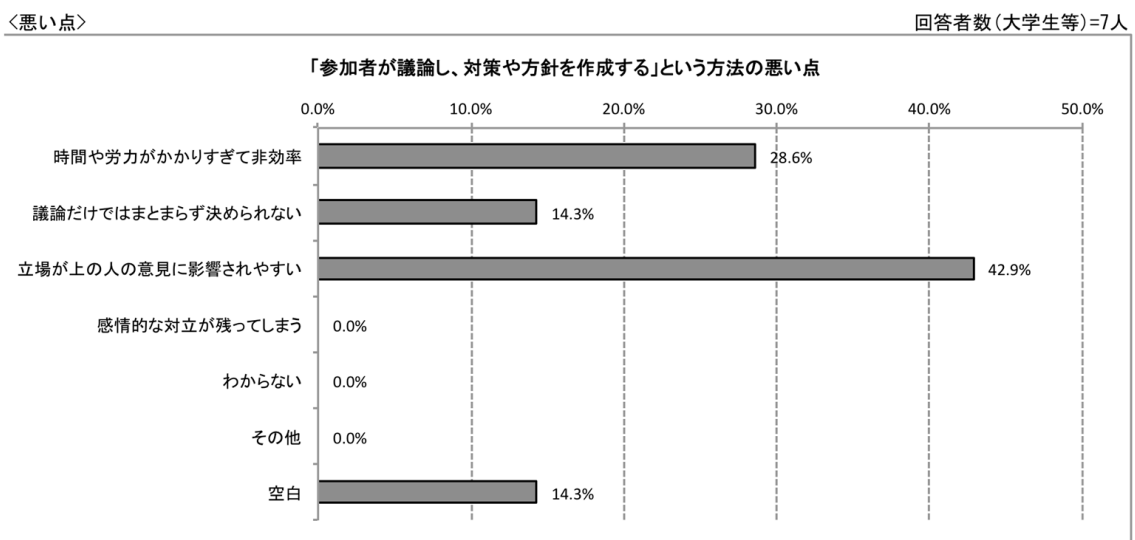


図 3-3-2 「参加者が議論し、対策や方針を作成する」という方法の悪い点（大学生等）

7. 「熟議2016 in 兵庫大学」での「議論の段階」において、あなたはどのことに最も大きな期待を持っておられますか。1つ選び番号を記入してください。

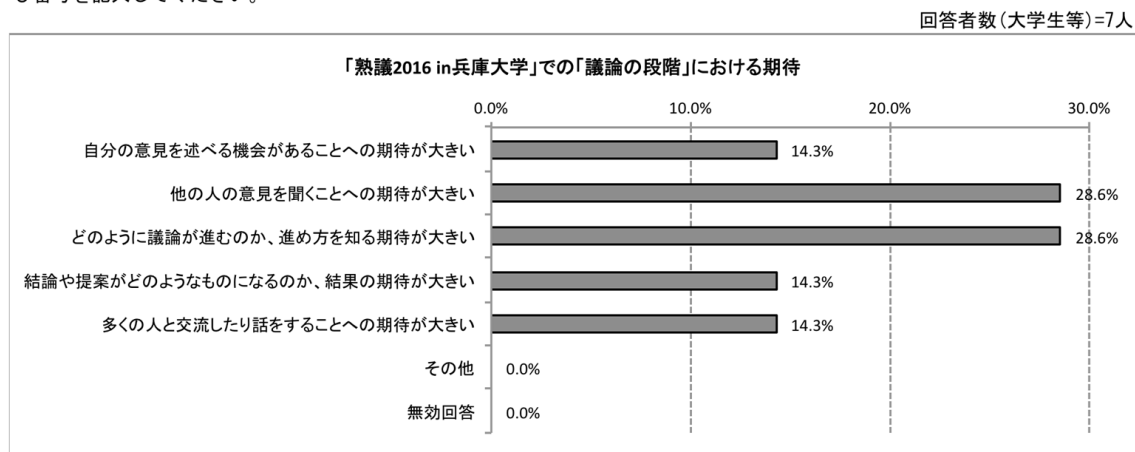


図 3-3-3 「熟議 2016 in 兵庫大学」での議論の段階における期待（大学生等）

(2) 事後アンケートにみる熟議の影響 ～意義深い熟議の実践～

参加した大学生は概ねプログラムに対して満足感を得ている。そのうえ学んだ知見を活かす意欲ももっている。9割近い大学生が、自分の意見を整理すること、他の参加者の意見を理解しやすかったかという問いに対して共感的であるが、高校生の回答にも見られたように熟慮と熟議の関係について明瞭であるとする大学生ばかりではなかったということがこのデータからも推察される。そうした課題を抱えながらも、テーマ「今、大地震が加古川地域を襲ったら？」への関心が高まり、知識を得たり深めたりする機会になった大学生はほぼ全員であった。さらにいえば、この数値は非常に評価できる。

学生の印象のなかで熟議の応用可能性についても前向きな認識が多く、「政策などへの様々な立場の人の意見の持ち方を知ること」をはじめ、意見をまとめる民主的な方法であり、行政が熟議のこうした結果に耳を傾けることの重要性も確認できる。そのなかでプログラムを通して多く人と話をできたことそのものへの価値を感じた印象は高校生とほぼ同じ印象であったといっていよう。

災害時の事柄への関心も、熟議前後で高校生と異なる傾向が見られた。高校生は、全ての項目において、熟議後の関心が高くなっていたが、大学生では、「住宅・建物の倒壊」「情報の入手が困難」「家族との連絡」「支援物資が入手できるまでの期間」「避難所の状況」「職場や学校の再開」「住宅の再建など生活の場所の確保」の7つの項目で関心の数値が下回っている。こうした項目についてなぜ関心が下がったのかについては少し検証が必要である【図 3-3-4】。

加古川地域を大地震が襲った場合の考え方については、いくつかの項目で検証すべき変化が見られた。「防災は主に自治体や政府の仕事であり住民の役割は限定されている」「被害を抑えるためには巨大な堤防の建設など目に見える施設や設備に頼る方がよい」といった項目への数値が上昇している。このことがどのような意味を持つのかも、より詳しい検証が必要である。一方で、「大学に大地震に備えるため果たすべき役割がある」といった項目にも若干の数値の低下が見られる【図 3-3-5】。こう

した数値の変化と、各グループでの熟議の内容がどのように関係しているのかについては学習論の観点からはそれほど詳しい検証がなされていない。どの項目の数値が上昇すべき、であるとか、この数値の変化が倫理的に適切ではないという考えを除きつつ丁寧に検討していきたい変化である。

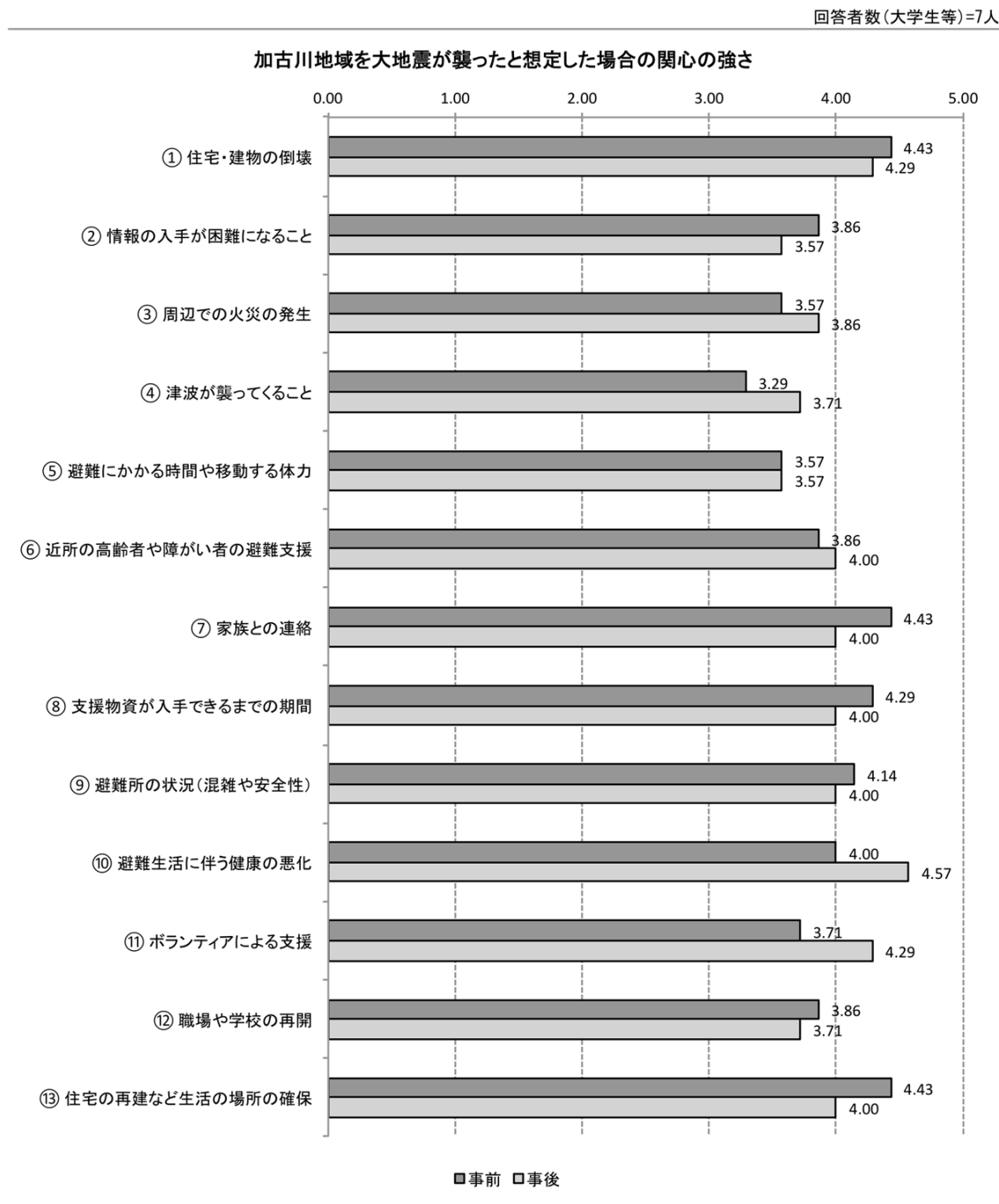


図 3-3-4 加古川地域を大地震が襲ったと想定した場合の関心の強さ（大学生等）

回答者数(大学生等)=7人

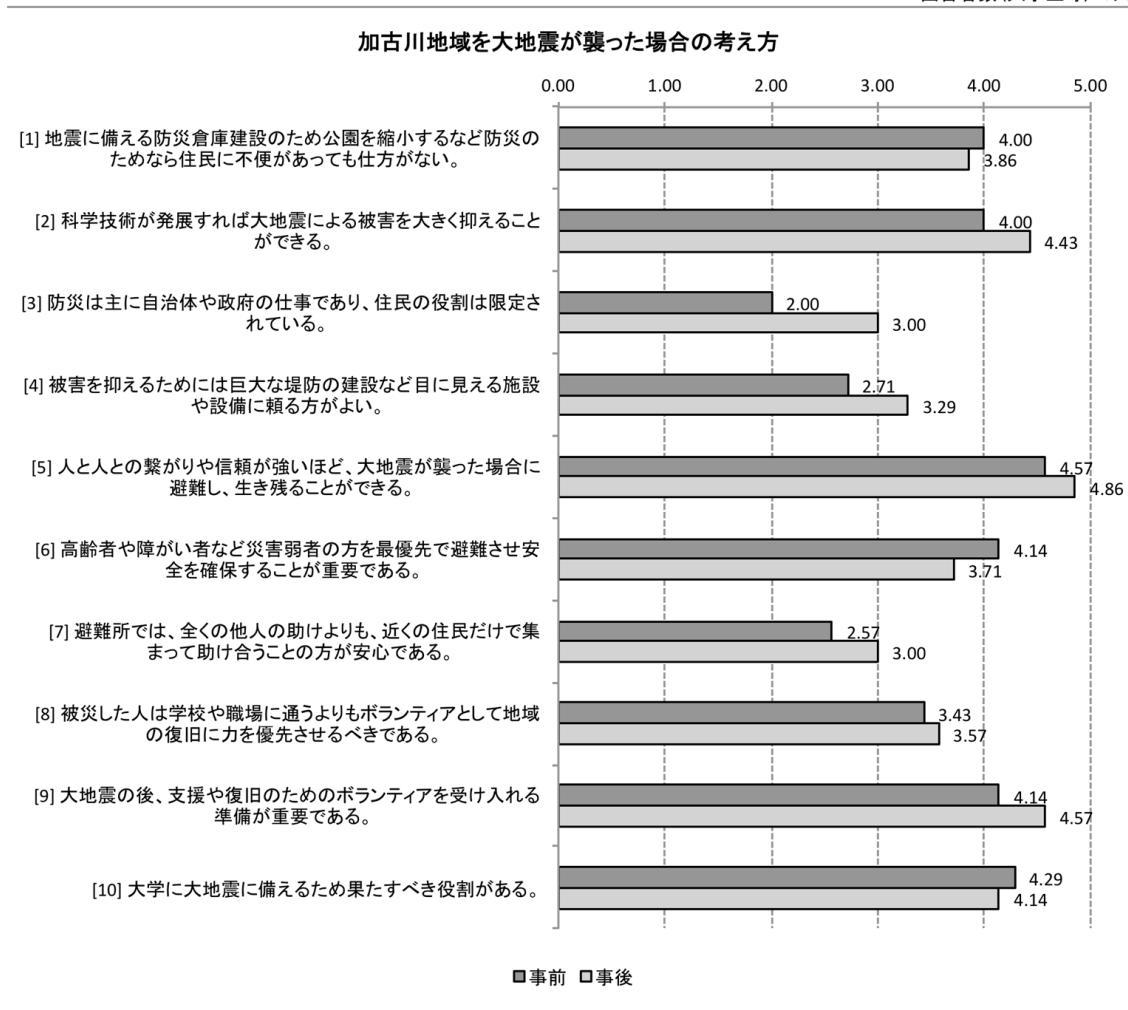


図 3-3-5 加古川地域を大地震が襲った場合の考え方（大学生等）

4. 自己認識シートにおける大学生の自己認識の変容

兵庫大学学生も高校生と同様、自己認識シートを記入した。学生ごとの役割（ファシリテーター、ワークショップ参加者）にかかわらずこのシートを分析すると、自主性（3.24→3.82）、思考力（3.12→3.59）、実行力（2.47→3.71）、対応力（3.00→3.94）、交渉力（2.53→3.82）、会話力（3.29→4.06）、計画力（3.00→3.47）、規律性（3.18→3.94）、運営力（3.00→3.88）、貢献性（2.59→3.59）の項目すべてにポジティブな変化を見ることができる。とりわけ、交渉力で+1.29、実行力は+1.24、そして貢献性では+1.00 という大きな変化を見ることができた【図 3-4-1】。

この数値から、大学生参加者全体の「傾向」として熟議を経て、自らの意見を表明する上での交渉力、グループワークの中でしっかりと表現する実行力について成長の手応えを得ていたことが考察できる。さらに、自分がワークショップの中で役割を果たしているという実感をもっていたことも併せ

て言うことができるであろう。しかしながら、役割（ファシリテーター、ワークショップ参加者）ごとに自己認識シートをみると、このプログラムが学生にとって必ずしもよいことばかりではなかったことが見えてくる。高校生と同様に、個人の自己認識について検討することも意義深いことであるが、ここでは、役割ごとの自己認識の変容を見ていくこととする。

兵庫大学学生 (N=17)

能力項目	実施前平均	実施後平均	増減
自主性	3.24	3.82	+0.59
思考力	3.12	3.59	+0.47
実行力	2.47	3.71	+1.24
対応力	3.00	3.94	+0.94
交渉力	2.53	3.82	+1.29
会話力	3.29	4.06	+0.76
計画力	3.00	3.47	+0.47
規律性	3.18	3.94	+0.76
運営力	3.00	3.88	+0.88
貢献性	2.59	3.59	+1.00

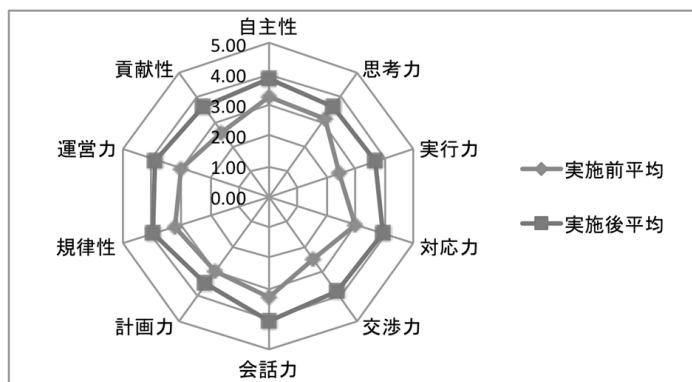


図 3-4-1 大学生（全体）の 10 項目（能力）の熟議実施前後の変化

(1) ファシリテーターとして参加した大学生の変容

熟議 2016 ではファシリテーターとして 10 人の大学生が参加した。この 10 名の自己認識シートには、多世代にわたる参加者が、非常に複雑な様態を示す災害の問題について議論することの難しさを見てとることができる。

自主性、思考力、実行力、対応力、交渉力、会話力、計画力、規律性、運営力、貢献性の 10 項目のなかで思考力と計画力にそれぞれ -0.10 、 -0.03 の数値の低下が見られたのである。少なくとも、熟議実施前よりも自己認識のレベルでは思考力と計画力には自信が持てなくなっていることになる

【図 3-4-2】。昨年の「熟議 2015 in 兵庫大学」では、運営力、計画力、貢献性が $+1$ を超える上昇を見せていた。（「熟議 2015 in 兵庫大学」報告書 p124 参照）この変化をどのように考えれば良いであろうか。当該年度のテーマの問題、ファシリテーターを担う参加者のパーソナリティの問題、事前学習の方法の問題、いかなることがこの数値の変化を生んだのかは、さらなる検証を行うことで明らかにする必要があるといえる。いずれにせよ、ファシリテーターは大きな学びを得ることができる役割であるとともに、「難しさ」もまた直接的に感じる役割であるということは意識しておかねばならないことである。

ファシリテーター (N=10)

能力項目	実施前平均	実施後平均	増減
自主性	3.20	3.68	+0.47
思考力	3.44	3.35	-0.10
実行力	2.28	3.79	+1.51
対応力	2.63	4.00	+1.37
交渉力	2.60	3.49	+0.89
会話力	3.21	4.32	+1.11
計画力	3.38	3.34	-0.03
規律性	3.20	3.87	+0.67
運営力	2.75	3.93	+1.18
貢献性	2.35	3.29	+0.94

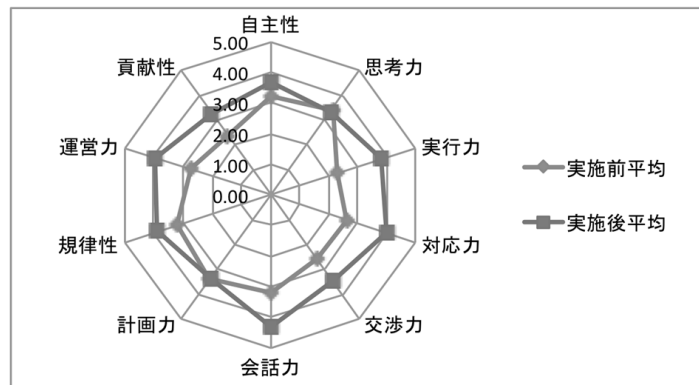


図 3-4-2 大学生（ファシリテーター）の 10 項目（能力）の熟議実施前後の変化

(2) ワークショップに参加者として加わっていた大学生の変容

「熟議 2016in 兵庫大学」のワークショップに参加した大学生は 7 名である。この 7 名の傾向についてデータをもとに検討する。自主性、思考力、実行力、対応力、交渉力、会話力、計画力、規律性、運営力、貢献性の 10 項目のなかで WS 参加学生の数値が最も大きく変化したのは、交渉力で+1.71、続いて、思考力・貢献性の+1.14、実行力と計画力の+1.00 と続く【図 3-4-3】。ワークショップ参加者は、ファシリテーターと比較すると、役割として「しなければならないこと」が少なく、議論に積極的に参加し自らの意見をいかにわかりやすく述べるかであるとか他の参加者の意見をいかに理解し、議論を充実したものにするかという意識をもちやすい。それゆえ、直接的に自己認識に影響を与えるような局面が少なく、数値の低下は認められにくいのかもしれない。反対に、ファシリテーターをつとめた学生に見られた実行力 (+1.51)、対応力 (+1.37) という項目における大きな数値の上昇もみることができない。参加者の自己認識の「ゆらぎ」がおこりにくい立場であると考察できる。

ワークショップ参加学生 (N=7)

能力項目	実施前平均	実施後平均	増減
自主性	3.29	4.14	+0.86
思考力	2.86	4.00	+1.14
実行力	2.71	3.71	+1.00
対応力	3.43	4.00	+0.57
交渉力	2.57	4.29	+1.71
会話力	3.43	3.86	+0.43
計画力	2.71	3.71	+1.00
規律性	3.14	4.00	+0.86
運営力	3.43	4.00	+0.57
貢献性	2.86	4.00	+1.14

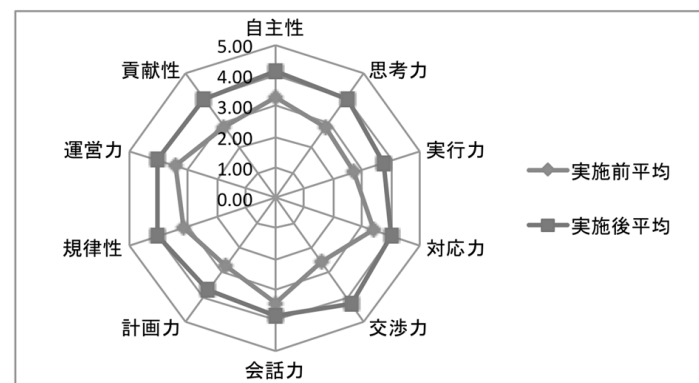


図 3-4-3 大学生（ワークショップ参加者）の 10 項目（能力）の熟議実施前後の変化

5. 総括 ～まとめ～

高校生は、もともとレーダーチャートの調査対象となる「力」に関心が高く、大学生にとっては、そうした「力」にそれほど強い関心を持っていないようにも考察された。しかしながら、高校生であれ、大学生であれ実際にはそれぞれの個別の課題を持ちつつ、熟議に参加してきており、レーダーチャートの変化からは、それぞれの高校生、大学生に非常に興味深い多くの学びを得ていることをみてとることができた。

事前・事後アンケートでは、高校生、大学生、（今回は言及しなかったが）一般参加者のプログラムに対する期待や傾向がつかめるため非常に有効なデータとなっている。しかし、災害に対する認識を問う部分では、少し問いが操作的に働いている側面があり、（行政主導で）（科学技術などを前提とした）ハードの整備よりもソフトの整備（人間関係を基軸とした）に重点を置くことが熟議の「正解」かのような認識がある。というのも、高校生、大学生のアンケートに対する回答が、事前アンケートの段階で人間のつながりや災害弱者の支援にウエイトがかかっている印象が強いのである。このことが、高校生、大学生の認識の実情を物語っているのであればただの邪推でしかないわけだが、一方で先に述べたようなソフト面を評価することの功罪についても意識的になるような視点を育む必要が求められる。

最後になるが、レーダーチャートは、全体的なパラメーターが熟議前後で確実に増加していることを示してはいるものの、高校生、大学生個人に目を向けると非常に個別性が高く、大きく高まった「力」と、パラメーターが低下している「力」がある。今後の課題としては、こうした個別性の問題をどのようにひろいあげながら熟議の「影響」「成果」を位置づけるのかという方法論が求められるであろう。

（小林洋司）